

## 国際バカロレア修了生の進路選択に関する探索的研究：海外大学／日本の大学をめぐる選択に着目して

江幡，知佳  
筑波大学大学院：博士課程

<https://doi.org/10.15017/4773099>

---

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 23, pp.1-16, 2022-03-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

## 国際バカロレア修了生の進路選択に関する探索的研究 —海外大学／日本の大学をめぐる選択に着目して—

An Exploratory Study on the International Baccalaureate (IB) Graduates' Career Decision-Making  
Towards Post-Secondary Education:  
Focusing on the Choice Between Foreign Universities or Japanese Universities

江幡 知佳

### 1. はじめに

国際バカロレア・ディプロマプログラム (International Baccalaureate Diploma Programme : 以下、IB) とは、全人的な発達や高等教育への準備、国際理解等を重視する後期中等教育プログラムである (岩崎 2018 など)<sup>(1)</sup>。IB の履修・修了により、生徒は世界の数多くの国や大学が認知している後期中等教育修了を示す資格である<sup>(2)</sup>IB 修了証 (IB Diploma) を取得できる。このプログラムの普及・拡大が、2010 年代以降の日本においては図られてきた<sup>(3)</sup>。そのねらいは、永山 (2013) によれば、①世界で活躍する人材育成、②人材流動性の向上、③高等学校カリキュラムへの波及効果にあり、特にその 2 点目に関して、インバウンドの効果 (海外からの学生の獲得) およびアウトバウンドの効果 (高校生の海外への送り出し) が期待される、とされている。

しかしながら、たとえ日本人が海外で IB 修了証を取得したとしても、帰国生として日本の大学に進学するとは限らない。また、日本で IB 修了証を取得した生徒が皆、海外大学に進学するとも限らない。それでは、いかなる要因が、IB 修了生の進学先の決定に影響を及ぼしているのだろうか。本稿は、国際通用性をもつといわれる IB 修了証を取得した生徒がいかなる過程で進学先を模索、決定しているかを、「日本人 IB 修了生等」に焦点を当てて探索的に明らかにすることを目的とする。なお、ここで日本人 IB 修了生等と表記した意図としては、詳細は後述するが、本稿が依拠するインタビュー調査の参加者のなかには、日本国籍をもつ IB 修了生に加えて、日

本での居住経験や被教育経験等があることにより日本語を話す外国籍の IB 修了生も 2 名含まれているためである。

本稿の構成は以下のとおりである。続く第 2 節では、先行研究を整理することにより、本稿の位置づけを明確にする。第 3 節では、研究方法を説明する。第 4 節では、IB 修了生の語りに基づきながら彼らの進路選択の様相を描く。第 5 節では、本稿をまとめ、加えて本稿の限界と今後の課題を述べる。

### 2. 先行研究の検討

主に日本人 IB 修了生を対象とした進路選択に関する先行研究を探ると、そのような先行研究は数少ないことが分かる。数少ない先行研究として、岩崎 (2007)、渋谷 (2016)、福嶋・江里口・飯野 (2019)、ならびに遠藤 (2020) 等を挙げられる。

岩崎 (2007) は、京都大学法学部・経済学部、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC)、および国際基督教大学のいずれかに在学していた IB 修了生を対象に、IB の体験、評価、入試での取り扱い、今後の進路等に関する質問紙調査を実施している。なお、上記の 3 大学の選定理由は、英国、オランダ、ドイツ、フランスのインターナショナルスクールで日本語を担当していた教員によって、日本の大学のなかでとりわけ IB を理解している大学であると認識されていたという点にある。結果として、たとえば、以下のことに言及している。「ディプロマ取得者 [IB 修了生] の多くは、大学進学先として、転学部な

どが可能でカリキュラムが柔軟、選択科目が多い私立大学を選択する。海外赴任者などの師弟の場合は、経済的に恵まれた層であることが多く、経済的事情により国立大学を選択する要素は少ない。また、その多くは国立大学から公務員や司法試験という国内的なルートよりは、私立大学から企業、とりわけ、組織の中で拘束されるよりは、研究者、ベンチャー企業、NPO 活動など自分自身の力でものごとを行う傾向が認められる」(岩崎 2007, pp. 124-125: □ は引用者による)。この研究は、2000 年代という現在よりも IB に関する知見の蓄積が極めて限られている時期において、IB と進路選択をめぐる当事者たちの認識の一端を詳らかにしている点で、貴重なものと言える。しかし、本稿の関心に照らすと、海外大学を選択した日本人 IB 修了生も存在するはずであり、彼らがなぜそのような選択をしたのか(なぜ日本の大学を選ばなかったのか)を理解することができないという点で、限界がある。

遠藤 (2020) は、ブラジルサンパウロ市の St. Nicholas School を卒業した IB 修了生を対象としたアンケート調査に基づき、彼らの進路決定方略を明らかにしている。なお、当該アンケート調査の対象には国籍の点での限定はかけられていないものの、日本人 IB 修了生も数多く含まれていることから (18/32 名)、遠藤 (2020) は本稿の先行研究に位置づく判断した。知見として、IB 修了生の多くは、海外を転々とする事への精神的疲弊や「大学外部の文化・人的機能〔特定の地域や国の文化及び人に対する愛着や興味〕」を理由に、進学希望地域を限定する傾向にあったこと (27/32 名)、進学希望地域を限定した IB 修了生もそうでない IB 修了生も、進路選択に際しては「大学の本来的功能〔専門知識を深めたい、自分の可能性を求める等〕」(淵上 1984a) を重視する傾向にあったこと等が示されている。だが、この研究では、上記のとおり研究デザイン上国籍の限定がなかったため、日本人 IB 修了生によって、海外大学あるいは日本の大学がいかに意味づけられながら進路選択がなされているのかは十分に明らかにされていない。

岩崎 (2007) ならびに遠藤 (2020) が海外の IB 認定校出身者を対象としていたのに対して、渋谷 (2016) および福島ほか (2019) は、日本の IB 認定校の IB 履修生等

を対象にインタビュー調査を行っている。結果として、渋谷 (2016) は、進学先を国内か国外か決めかねている生徒が複数いたこと、最終的に進学国を変更した生徒もいたこと、治安や人種差別、学生文化の違い等から海外大学を敬遠する家庭があること、家庭の経済状況が海外大学進学を阻む大きな壁になっていること等を論じている。また、福島ほかは、「IB 特別入試を導入する大学が増加している今日においても、国内大学への進学を志望する生徒 [IB 修了生] にとっては、依然として志望大学や学部への入学が円滑には行われていない現状が明らかになった」<sup>(4)</sup> (福島ほか 2019, p. 38: □ は引用者による) と述べている。

以上の検討を踏まえると、日本人 IB 修了生による進路選択については、2000 年代以降、一定程度研究が蓄積されてきたと言える<sup>(5)</sup>。しかしながら、世界各国で IB を修了した生徒たちが、いかなる過程で、海外大学を選び、あるいは日本の大学を選んでいるのかという点については、十分に明らかにされているとは言い難い。この残された課題を解決することによって、必ずしも世界大学ランキングといった一元的な尺度に基づいて進路選択をしている訳ではない IB 修了生の姿が見えるはずである。IB の普及は、国内外の大学が並列に比較・検討されることにつながり、結果として日本の大学を海外大学との競争に巻き込むおそれがあると指摘されているが (渋谷 2016)、その「比較・検討」の内実とは、一体いかなるものなのか。この点に関する理解を深めることは、国際化が進んでいると言われる今日において、日本の大学に対していたずらに一元的な尺度に基づく競争を煽るのではなく、多様な生徒・学生の視点を考慮しつつ大学のあり方を考えるよう促すことに資すると思われる。

次節では、本稿の目的を達成するための研究方法を説明する。

### 3. 研究方法

#### 3.1. 調査の概要

本稿は、進学先の決定に至るまでの IB 修了生の経験を探索的に明らかにすることを試みるものであり、ゆえ

表1 調査参加者のプロフィール

表記	布置象限	出身校 (IB認定校)	所属大学	所属する学部学科	学年	後期中等教育段階までの海外経験	調査日
G1さん	I	日本の高校 (私立)	海外の大学 (米国)	リベラルアーツ	2	4歳～9歳 (海外の現地校)	2020/11/11
G2さん	II	日本の高校 (私立)	海外の大学 (米国)	リベラルアーツ	3	小5、中1 (ホームステイ)	2020/11/12
G3さん	III	日本の高校 (公立)	日本の大学 (私立)	法	2	小4～中3 (日本人学校、海外の現地校)	2020/11/13
G4さん		日本の高校 (公立)	日本の大学 (私立)	環境情報	1	1歳～5歳、小5～中3 (日本人学校、海外の現地校)	2020/11/13
G5さん		日本のインターナショナルスクール	日本の大学 (国立)	医	3	小5～高1 (海外の現地校)	2020/11/17
G6さん	V	海外のインターナショナルスクール (シンガポール)	海外の大学 (英国)	工	1	小4～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/9
G7さん		海外のインターナショナルスクール (香港)	海外の大学 (オランダ)	コンピュータ科学	2	就学前、高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/15
G8さん		海外のインターナショナルスクール (タイ)	海外の大学 (トルコ)	医	3	0歳～2歳、5歳～小1、小2～高3 (海外の現地校、日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/12/16
G9さん		海外のインターナショナルスクール (マレーシア)	海外の大学 (カナダ)	リベラルアーツ	2	3歳～6歳/Year6～Year9 (インターナショナルスクール)	2020/12/24
G10さん		海外のインターナショナルスクール (カナダ)	海外の大学 (米国)	未定	1	高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/2
G11さん	VI	海外のインターナショナルスクール (ドイツ)	海外の大学 (英国)	経営	1	中1～高3 (日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/12/3
G12さん		海外のインターナショナルスクール (英国)	海外の大学 (英国)	数	3	0歳、中1～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/16
G13さん	VII	海外の現地校 (オーストラリア)	日本の大学 (私立)	商	4	就学前、高1～高3 (海外の現地校)	2020/11/18
G14さん		海外の現地校 (オーストラリア)	日本の大学 (私立)	リベラルアーツ	3	中2～高3 (日本人学校、海外の現地校)	2020/11/20
G15さん		海外のインターナショナルスクール (英国)	日本の大学 (国立)	経済	1	2歳～小3、高1～高3 (海外の現地校、インターナショナルスクール)	2020/11/24
G16さん		海外のインターナショナルスクール (カンボジア)	日本の大学 (私立)	リベラルアーツ	2	4歳～高3 (海外の現地校、日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/11/25
G17さん		海外のインターナショナルスクール (シンガポール)	日本の大学 (国立)	法	1	高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/11/26
G18さん	VIII	海外のインターナショナルスクール (ドイツ)	日本の大学 (国立)	数	4	中3～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/9
G19さん		海外のインターナショナルスクール (フィリピン)	日本の大学 (国立)	社会	4	5歳～高3 (日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/12/23
G20さん		海外のインターナショナルスクール (シンガポール)	日本の大学 (私立) (英語プログラム)	国際政治経済	3	高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/23

出典：筆者作成

に質的研究、なかでも半構造化インタビューの方法をとることとした。たとえば、大学イメージ (海外大学や日本の大学をどのように捉えているか) が、どのように進学先の決定に影響を及ぼしているかを明らかにするためには、質的研究が有効と言えるだろう。また、インタビューは、「質的研究の最も有力なデータ採取ツール」であり、「研究参加者による言語化を待つだけでなく、研究者が問うことで、言語化を促すことができる」(大谷 2019, p. 138) と言われている。さらに、インタビューは、構造化インタビュー、半構造化インタビュー、非構造化インタビューに分けられるが、本稿では、質問に対する回答の結果を見ながら、必要なそれ以外の質問を自由に行う半構造化インタビューの方法を採用することで (大谷 2019)、インタビューの個々の発話に寄り添いながら、

彼らの進路選択過程をより深く理解できると考えた。

インタビュー어의プロフィールについては、表1に示したとおりである<sup>6)</sup>。インタビューーは基本的に、日本国籍を有する両親をもつIB修了生である。ただし、G3さんは中華人民共和国国籍を有する両親をもち、G8さんはトルコ国籍を有する父親をもつ。両名共に、日本での居住経験や被教育経験等があるため、流暢に日本語を話す。

なお、筆者ら<sup>7)</sup>は、インタビュー調査に先立ち、サンプリングのためのアンケート調査を実施した。アンケート調査では、出身のIB認定校の所在地や種別、および現在所属している大学の所在地や学部学科等の基礎的事項に加えて、「高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更があったか」、「なぜ海外大学/日本の大学への進学を希望したか」等をたずねた。このような手続きをと

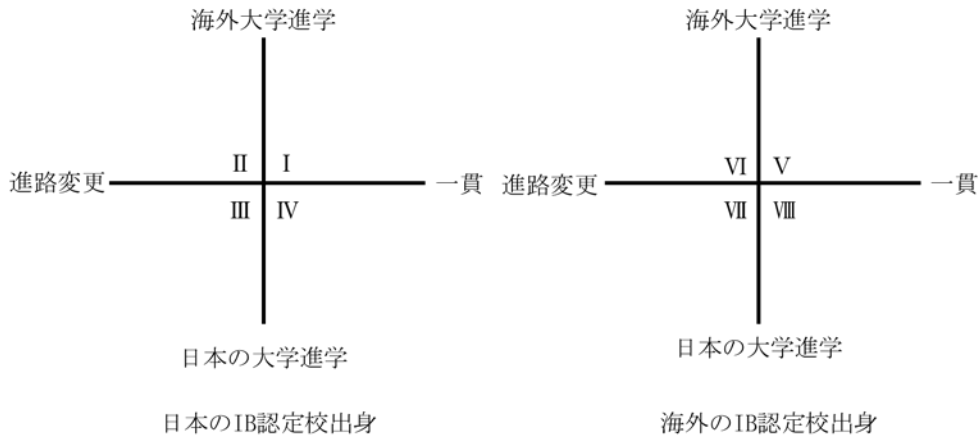


図1 本発表におけるIB修了生の進路選択過程のパターン

※「進路変更」は、「あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか」というアンケートの質問に対して、「日本の大学への進学を希望していたが、海外の大学への進学を希望するようになった」あるいは「海外の大学への進学を希望していたが、日本の大学への進学を希望するようになった」を選択したことを指す。

出典：筆者作成

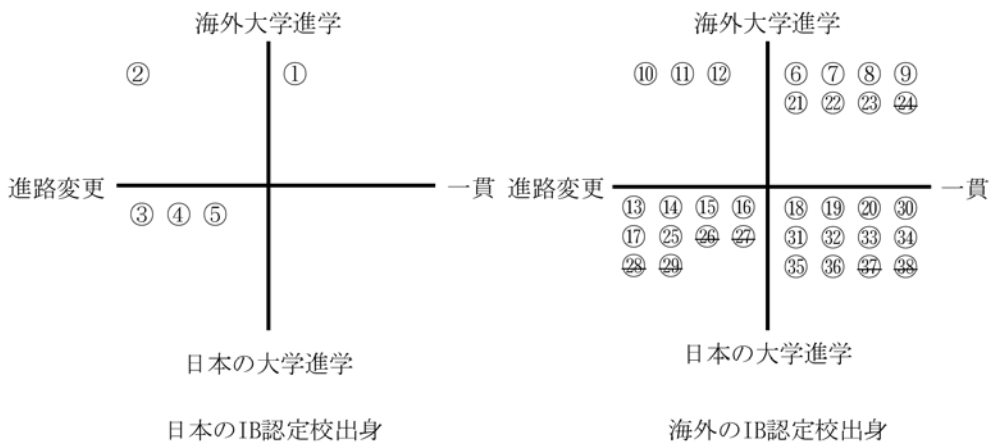


図2 アンケート調査への回答に基づくIB修了生の進路選択過程の布置

※数字の上の一重線は、インタビュー参加の意思がなかったことを指す。

出典：筆者作成

った理由は以下のとおりである。すなわち、渋谷 (2016) が、海外大学と日本の大学とで進学先を決めかねている IB 履修生の存在を指摘していることを踏まえると、IB 修了生の進路選択を考察対象にする際には、進路をめぐる迷いや進路変更などを想定する必要があると考えた。そこで、本稿では、IB 修了生の進路選択の過程を図1に示すように8つに類型化し、各パターンへの布置を考慮しつつ、インタビューを選定することとしたためである。このような方法は、混合研究法の説明的デザイン、参加者選定モデルと呼ばれる (Creswell & Plano Clark 訳書

2010)。

アンケート調査の協力者の募集方法として、筆者らがこれまでの研究活動を通じて親交のあった A 氏を通じて、IB 修了生が数多く登録している海外子女向けのオンライン家庭教師募集のメーリングリストに、本調査への協力を依頼するメールを送付した。アンケート調査への協力者は計 38 名であった。アンケート調査のなかに、インタビュー調査への協力意思を確認する設問を設け、協力意思を示した IB 修了生に対して、図1の布置のバランス等を考慮しながら、随時、インタビュー調査への参

加を依頼した。

半構造化インタビューの概要は以下のとおりである。インタビューは、インタビューイの希望する日時に、日本語で実施した。時期は、2020年11月～12月である。1名あたりのインタビュー所要時間は約1時間を見込んでいたが、実際には45～90分程度であった。表1にあるとおり、インタビューイの所属大学の位置する国は多様であるため、および、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行している状況にあったことから、対面式でなくZoomを用いてインタビューを実施した<sup>8)</sup>。中心的な質問として、これまでの経歴について/IBを選択した理由について/大学進学希望について/進路選択の阻害要因について/高校での進路指導について/保護者からの進路に関するはたらきかけについて/塾や予備校、家庭教師等の利用について/自身の進路選択に対する評価について/大学での学習経験について等を設定した。インタビューの内容は、Zoomのレコーディング機能を用いて全て録画・録音した。録音・録画データは、文字テキストデータへと変換し、分析の素材とした。

なお、調査の実施に伴い、筑波大学人間系研究倫理委員会の審査を経た(課題番号 筑2020-108号)。倫理的配慮の具体的な手順は以下のとおりである。アンケート調査の実施に際しては、①収集したデータは鍵を掛けた机で保管すること、②調査を通じて得られたデータは、研究終了後、一定期間経過後に完全に消去すること、③調査で知り得た内容を公表する場合、個人名を使用しないこと、④アンケート調査への回答開始後も、回答したくない項目に対する回答の拒否、中止、撤回によって何ら不利益を受けないこと、および⑤アンケート調査への回答をもって調査への同意とさせていただくことを、Google Formに明記した。また、インタビュー調査の実施に際しては、冒頭で、(1)インタビュー調査の内容はICレコーダー等に記録し、収集したデータは鍵を掛けた机で保管すること、(2)調査を通じて得られたデータは、研究終了後、一定期間経過後に完全に消去すること、(3)調査で知り得た内容を公表する場合、個人名を使用しないこと、また、調査協力者にインタビューデータまたは草稿の内容を公表前に確認いただき、同意を求めること、(4)調査への参加は、調査協力者が自由に判断できること、

質問に対して、答えたくないことについては答えなくともかまわないこと、いつでも中断・撤回でき、そのことにより調査協力者への不利益は一切生じないこと、および⑤インタビュー調査の間に適宜休憩を取ることができることを説明した。その上で、調査に協力できる場合、同意書に記入いただいた。

### 3.2 分析概念

進路選択を捉えるためには、いかなる概念に着目する必要があるのか。この点について、以下の栗山・上市・齊藤・楠見による指摘は示唆的である。すなわち、「高校生の進路決定は、競合する多重制約条件(目標、動機、考慮、類推など)を充足させる意思決定を行っていると考えられる。その決定方略には、先述の目標(将来の目標)、内的制約(進学動機)、外的制約(考慮条件)が影響を与えるだろう」(栗山ほか 2001, p. 10)。この指摘を踏まえて、本稿は、将来の目標/進学動機/考慮条件と進路選択との関連性に着目しつつ、分析を進めていくこととした。

なお、大学進学動機に関しては、1970年代以降、大学教育の大衆化を背景として、教育心理学およびキャリア教育学分野を中心に研究が蓄積されてきた。たとえば、*淵上(1984a)*は、大学進学動機として、①「大学の本来的機能」(専門知識を深めたい、広く教養を身につけたい等)、②「家族への配慮と規範機能」(親孝行のため、親が勧めるから等)、③「モラトリアム機能」(まだ社会へ出たくない、大学で遊びたい等)、④「大学の副次的機能」(大学で多くの人に知り合いたい、大学でクラブ活動をやりたい等)、⑤「大学の経済的価値機能」(裕福な生活を送りたい、一流企業に就職したい等)を挙げている。ただし、後続研究である*淵上(1984b)*は、一般的な大学進学動機と特定の大学・学部を選択する動機とを分けて考えることの必要性を指摘している。その上で、特定大学選択動機として、(1)「志望大学の内容の充実」(学校の雰囲気が良いので、校風や伝統があるので等)、(2)「志望大学の経済的・地理的要因」(授業料が安いので、通学に便利なので等)、(3)「自己実現への適合」(自分の適性や好みに合っているため、将来の志望職業と一致しているため等)、(4)「入学の可能性」(合格の見込みがあるので、

自分の学力水準で行けると思ったので等)を指摘している。

また、「特に具体的に大学を選択する段階になると、学費の問題や生徒本人の学業成績などより現実的な事柄に直面すると思われるので、周りの人々に〔ママ〕影響が大になると思われる」(渚上 1984b, p. 229)という指摘も重要である。当然のことではあるが、自身が進学によって何を実現したいかといった積極的な要因だけでなく、現実的に進学に際し直面するさまざまな制約(消極的な要因)、あるいは進路選択における他者の影響を無視することはできないのである。

以上、簡単にはあるが本項で検討した進路選択をめぐる先行研究に基づき、本稿は、進学動機および大学選択動機、進路選択に際しての制約、他者の影響=人的影響源(渚上 1984b など)、将来の目標等に関連する文字テキストデータ内の記述に適宜コードを付与することとした。その際、質的データ分析ソフトである MAXQDA 2020 を用いた。

次節以降、本稿の目的を達成するため、インタビューの語りを記述していく。その際、氏名は仮名とした。また、個人情報保護のためおよび読みやすさを考慮して、引用する語りには、内容が変わらない範囲で加筆・修正を加えた。さらに、引用する語りに引用者による補足を加えた場合、□内に表記した。

## 4. 分析結果と考察

### 4.1. 海外大学進学につながる動機や制約

本項では、どのような動機や制約等が、海外大学進学につながっているかについて、インタビューの語りに基づき記述する。

最終的に海外大学進学に至ったインタビュー(象限 I、II、V、VI)の多くは、「大学の本来的功能」を重視した動機に基づき日本の大学に進学した場合に、「学業に対するリアリティショック」(半澤 2007、半澤 2009 など)を受けることを予測し、その回避行動として、海外大学進学を選択したと言える。学業に対するリアリティショックとは、半澤による一連の研究で提唱されている概念であり、入学前に抱いていた大学における学業イメ

ージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現実におけるズレによって生じた否定的な違和感と定義されている(半澤 2007)。このような違和感は、学業志向の強い学生にしばしば抱かれるという。

学業に対するリアリティショック予測-回避という動機(概念)があらわれている典型的な語りを以下に引用する。

(聴き手) [G11 さんは] 最初は日本 [の大学] かなと考えていたということなんですけれども、9年生くらいではいかがですか。

(G11) 9年生でもまだどちらかという日本 [の大学] が強い。でも知り合いで1人、日本 [のX大学] に留学、[英語] プログラムに入学して、そこからイギリスに受験し直した先輩がいて、その子と結構仲が良かったので、いろいろ話は聞いていたんですけれど。その子の影響で何となく海外も視野に入れ始めたというか。そこから何となく日本以外にも調べ始めたのもあります。

(聴き手) 差し支えなければ、先輩はなぜ [X大学] から方向転換されたんでしょうか。

(G11) 多分環境があまり合っていなかったというのを言っていて。日本の大学、英語プログラムだったので、やっぱり普通の大学とは異なると思うんですけれど。でもやっぱり教授の教え方とか勉強内容のレベルとか、周りの生徒 [ママ] のレベルとかがあまり彼女が思ったほど高くなかったというか。というので、イギリス [の大学を] 受け直したというふうに聞きました。

G11さんは、海外のIB認定校在籍時に進路希望を変更し、海外大学へ進学した。その変更のきっかけは、日本の大学で学業に対するリアリティショックを実際に経験した先輩からの話であった。

また、日本のIB認定校在籍時、一貫して海外大学進学を志望していたG11さんは、以下のように語った。

(G1) 中学校時代は、国内 [の大学] しか考えていなくて、逆に海外に行くとかあまり、何も思っ

ていなかったんですけど。私もはっきり覚えていないんですけど、確か中3ぐらいから、大学に行く意味っていうか〔考え始めて〕。〔中略〕大学4年間で何が本当に学べるのかなとか、私の周りで〔日本の〕大学に行って、遊んでいる人が多かったんです。だからそこに疑問を感じているところがあつたっていうのは、正直、1番大きいんですけど。

すなわち、G1さんの海外大学志望の背後には、日本の大学進学後に「遊んでいる」ように思われた周囲の学生の存在があつた。

G11さんおよびG1さんの語りから、人的影響源（淵上1984b）としての先輩、あるいは周囲の日本の大学生を指摘できる。この影響源が、G11さんによる「教員不満」や「講義水準不満」（半澤2007）などの予測、G1さんによる日本の大学はモラトリアム機能あるいは副次的機能重視というイメージの形成につながつた。結果として、彼らは、学業重視という思いをもって日本の大学に進学するとリアリティショックを受けるのではないかと予測し、それを回避するために、海外大学への進学に至つた。

日本の大学で周囲の学生がアルバイトやサークル重視の生活をしていても、本人が強い意志をもっていれば学業に力を入れることは可能であるという見方もあるだろう。この点に関して、G12さんの語りを参照したい。

（G12） 良い意味でも悪い意味でも私は結構周りに影響されるタイプなので。日本〔の大学〕に行つて勉強ができない、もちろん自分が与えられているものを全て利用して、教授とかにもちゃんとアプローチしてとか、そういうふうになつてと思えばできるというのは、本当にそのとおりだと思つて。そういう子たちがいるというのは分かつたんですけど。自分が、周りが遊んでいる環境に入つたら、きっと、たとえば今〔英国の大学で〕しているだけの勉強とか、それだけの集中力は、自分には保てないなと思つたということと、周りがそういうマインドセットなら自分もきっとそ

ういうふうに、いくら自分に厳しくとかいつても、そこまでの経験が得られないんじゃないかなつて思つたというのが、1番大きいところで。

G12さんは、海外のIB認定校に在籍していたときに、日本の大学から海外大学へという進路希望の変更を経験した。当初は医学部で学びたかつたため日本の大学へ進学しようと考えていたが、「大学生活のメインはサークルとか、旅行に行くとかそういうところにあつて、授業は単位を取るためにあつて、試験の直前に詰め込んで勉強するみたいな、そういう大学生活は送りたくないな」との思いから、海外大学を志望するようになり、現在は英国の大学で数学を学んでいる。

それでは、学問志向をもち、海外大学への進学を目指す場合、IB修了生はいかなる観点で国や大学を選択するのだろうか。

海外大学への進学を希望した場合にどの国を選ぶかという点は、専攻（学びたい学問分野）の決定状況によって左右される。たとえば、米国のリベラルアーツ・カレッジに在学しているG10さんは以下のように語つた。

（G10） イギリスとアメリカっていうの、まずそこで考えて。有名な大学ってイギリスとアメリカにあるなつてなつて。ただ、僕、やりたいことが決まっていなかつたので、イギリスはないなというふうになつて。〔中略〕アメリカのなかでリベラルアーツ・カレッジが良いっていうのが、〔中略〕リベラルアーツ系の学校に結構、少人数の授業が多いようなところを選びたいなつていうふうになつて思つたんですね。

インタビュー実施時に大学1年次であつたG10さんは、教員やティーチングアシスタントが熱意をもって関わつてくれている現在の状況について、「自分が勉強するのに必要なものは全て揃つていくなつて。これ以上、何も望むことはないなつていう、すごく幸せだと思つている」と語つており、学問志向を強くもつていると言える。ただし、G10さんは、進学先を模索する段階では特に関心がある学問分野があつたわけではなかつた。よつて、



幅広く学べ、かつ比較的小規模であるという理由で、現在在学しているリベラルアーツ・カレッジを選んだ。

また、カナダの大学に在学している G9 さんは、オーストラリアの大学も進学先の候補としていた経験を踏まえて、以下のように語った。

(G9) もしオーストラリア[の大学]に行ったら、もしかしたら化学だけしか絞れなかった[専攻できなかった]かもしれないので、[人文学 (Arts) と科学 (Science) の] 両方を両立してできるのは[カナダの所属大学] だったのかなって思います。

G9 さんは、「IB で 1 番好きな科目は何なのかって考えたときに化学と演劇って思ったので、できればその 2 つをやりながら[大学で専攻を]決めていったら良いかな」と考え、人文学と科学から 1 つずつ専攻を選び学ぶことが可能な現在在学中の大学、学部を選択した。

G10 さんや G9 さんとは対照的に、英国の大学の工学部に在学している G6 さんは、「もともと文学は得意じゃないので、そっち系、無理だなって思ったら理系に行くしかないの。[中略] 物を作るのは小さい頃から好きだったので、工学部、面白そうだみたいな感じで」と大学入学以前に専攻を決定した経緯を語った。その上で、「工学部だと工学部の内容しかできない」という現在の特定分野に特化した学習状況に対して、満足しているという。

すなわち、大学の本来の機能を重視した進学動機は、漠然とした学問志向／幅広い学問志向と特定の分野に特化した学問志向に分けられる。そうした志向性の違いは、大学選択動機に反映され、北米の大学への進学か欧州の大学への進学かを規定している。

とはいえ、どの国（あるいは大学）を選ぶかは、学問的な志向性のみで規定されるわけではない。海外大学進学には経済的障壁が立ちほだかるゆえ、より安価な国や大学を探すということは十分に考えられる。事実、「[両親から、進学先の選択に際して] お金はそんなに気にしないで良いよって言われていました」(G6) といったようなインタビューはごくわずかで、ほとんどのインタビューからは、海外大学進学を検討する際に経済的障壁が存在したことや奨学金を受給できたからこそ海外大

学進学が実現したこと<sup>(9)</sup>が語られた。そして、経済的障壁を乗り越え海外大学進学を実現させるため、インタビューのなかには、学費の高額な米国や英国<sup>(10)</sup>以外の国を進学先に選択したものがいた。その例として、オランダの大学に在学中の G7 さん、およびトルコの大学に在学中の G8 さんの語りを引用したい<sup>(11)</sup>。

(G7) [学費を] 大体の目安として、日本の私立[大学] プラスアルファぐらいで収めようっていう。別に親に言われているわけでも何でもなくて、すけれど、ちょっと現実的に考えて。そうするとオランダ。今の大学だとか、慶應のちょっと高めぐらい。

(G8) 国立大学はトルコではお金がかからないんですよ。授業料もなくて。だから、僕も今授業料がかかっていなくて、タダで行けている。[中略] やっぱ 1 番気にしているところではありますね、学費は。イギリスを諦めた理由とか、アイルランドを諦めた理由というのも学費の面が大きいし。

G7 さんは、幼い頃にドイツに住んでいた経験から、「ヨーロッパに行きたいなっていう、漠然とした願望」を抱いていた。そこで、ヨーロッパのなかで、英語で学ぶことができかつ学費が相対的に安価な学士課程を探し、オランダとベルギーの大学を検討する過程を経て、最終的に工学分野で有名な現在の所属大学への進学に至った。また、トルコ国籍の父親をもつ G8 さんは、「やっぱり IB 取っているからにはイギリスも受けておきたいな」との思いから<sup>(12)</sup>、英国やアイルランドの大学への進学も視野に入れていた。しかし、上記の語りにあるように、学費の点を踏まえてトルコの大学への進学に至った<sup>(13)</sup>。

G7 さんと G8 さんの事例から、彼らは、入学前にさまざまな大学について情報を収集する段階 (search phase) において、広い視野をもっていたために、海外大学進学を実現できたと言える。「大学選択理論」(college choice theory) に依拠すると、①大学に進学するか否かを決定する段階 (predisposition phase)、②上記の情報収集の段階、そして③最終的に実際に入学する大学を決定する段階

(choice phase) を経て、人々は大学進学に至る (Hossler & Gallagher 1987) <sup>(14)</sup>。G7さんとG8さんは、第2の段階において、経済的障壁の存在ゆえに、米国や英国以外の比較的安価な国(大学)を検討せざるを得なかった。その際、彼らは、米英、あるいは日本以外の国を検討の対象に含めていた。この視野の広さが、海外大学進学を可能にした。加えて、IB 修了証の世界的な認知度の高さも、海外大学進学を後押しした。事実、G7さんとG8さんは、IB 修了証を活用して、それぞれオランダの大学/トルコの大学に進学した。具体的には、G7さんは、IB の最終試験の得点とエッセイの提出、および数学と論理に関するオンラインテストの受験によって、G8さんは、IB の最終試験と英語テスト (TOEFL) の得点、自己推薦文、教師からの推薦文の提出をもって、可否の判定を受けたという。

国あるいは大学によって、IB をいかに入試において活用するかは異なっている。たとえば、米国では、高校での大学準備科目の成績や全米統一テスト (SAT、ACT) の成績、高校での成績表における全科目の成績、エッセイ、高校教員による推薦書等に基づいて、大学は選抜を行っている (松井 2009)。IB は大学準備科目に含まれると考えられる。ゆえに米国では、IB の最終試験の成績は、あくまで選抜のための一つの資料である。対して、英国の大学等の場合、IB の最終試験で一定以上の成績を収めることが大学入学資格になる場合もある<sup>(15)</sup>。現在、英国の大学に在学中のG6さんは、IB に加えてSAT の成績の提出を求める米国の大学や小論文を課す日本の大学の入学者選抜と、英国の大学の入学者選抜とを対照させて、「[英国では] IB [修了証] を取っていると大学進学、成績だけで結構受かるので楽っていうのもあって」と語った。すなわち、G6さんにとって、英国の大学を進学先として選択したことの要因には、IB の最終試験の成績が選抜の際の主たる資料とされることがあった。ただし、G6さんと同様にIB と SAT との両立の困難を米国の大学を受験しなかった理由として挙げたインタビューは複数いたものの (G8、G15)、IB の修了証や試験成績が選抜の際にどのように活用されるか、あるいはどの程度重視されるかという点を、進路選択の際に重視した観点として直接的に語ったインタビューはそれほど多くなかった。

以上、海外大学進学につながる動機や制約等を、インタビューの語りに基づき整理してきた。それに対して日本の大学進学につながる要因とは何かを、事項ではみていきたい。

#### 4.2. 日本の大学進学につながる動機や制約

本項では、どのような動機や制約等が、日本の大学進学につながっているかについて、インタビューの語りに基づき記述する。

日本の大学進学を選択した動機として、インタビュー (象限Ⅲ、Ⅶ、Ⅷ) からしばしば聞かれたのは、日本で暮らしたい、あるいは将来的に日本で働きたい<sup>(16)</sup>という希望である。典型的な語りを以下に引用する。

(G16) 正直、日本で暮らしたことがなかったの  
で、日本で暮らしたいなっていうのと、日本語も  
英語もどちらも伸ばしたいなっていうのもあっ  
て。

(G19) 小さい頃からずっとフィリピンに住んで  
いたので、日本の大学に行きたいっていうのはず  
っと思っていて。

(G20) 将来的な就職も日本かなっていうので、日  
本で就職するんだったら日本の大学の方が良い  
だろうと。暮らしやすさももちろんありますし。

(G13) 昔から日本で、そもそも就職したいって  
いうふうに思っていたのが、ようするに、日本と海  
外をつなげられるような、[中略] したいなとい  
うふうに、何となく漠然と思っていたので。日本  
で暮らしつつも海外とのつながりを保てるような、  
そういう懸け橋みたいなことができればなとい  
うふうには思っています。

この結果は、遠藤 (2020) による指摘、すなわちIB 修了生が進学希望国を絞る理由には、海外を転々とする生活への精神的疲弊、就職、大学外の文化・人的機能が挙げられるという指摘におおむね符合する。大学選択は、

基本的に生活地域の選択と不可分であり（中村 2011）、IB 修了生が日本の大学を選択する場合、その理由のうち一定の割合は、日本の大学（での学び）自体というよりもそれに付随する日本ででの生活を求めることにあるのだろう。

また、なぜ、日本ででの就職を希望する場合には日本の大学に進学した方がよい、という考えが生じるのか。この点に関して、以下の嶋内（2014）による指摘が参考になる。いわく、日本におけるグローバル人材の特徴としては、越境的なコミュニケーション手段としての語学力や能動性・主体性に加えて、『日本』という国の枠組に規定された社会に関する知識を持ち、『日本』という国を構成する様々な要素を持って自分自身を構築し、それを体現する『日本人』としての自覚や主体性という武器を持つことが期待されている」（嶋内 2014, p. 113）。この指摘を踏まえると、企業の採用時にも、「国際性」と同時に「日本人らしさ」のようなものが求められるということは想像に難くない。その「日本人らしさ」のようなものを身につけていることは、日本の大学で学び卒業したという事実によって証明されると考え、日本ででの就職を希望する IB 修了生は、日本の大学への進学に至るのではないか。

さらに、以下に示すとおり、日本の大学への進学という選択の背後には、しばしば金銭的な制約や家族への配慮がある。

(G16) [両親から] 1人っ子じゃないので、学費とかも考えてねみたいな感じでは言われていました。

(G17) [所属大学は] まず、国立なので授業料が圧倒的に、他に併願していた私立の大学とは違って[安い]。わざわざ行かなくても良いところを、[高2で] シンガポールまでついて行って、インター [ナショナルスクール] に通わせてもらったので。国立に合格できたら、国立に通いたいなっていうのも思っていたのもありますし。

G16さんとG17さんはともに、高校（海外のインター

ナショナルスクール）在籍時に海外大学から日本の大学へという進路希望の変更を経験している。結果として、G16さんは日本の私立大学、G17さんは日本の国立大学への進学に至った。そうした経路をたどった要因には、海外大学の授業料が相対的に高額であること、海外大学で学ぶことに伴う生活費の負担増、およびそれらに付随する両親への配慮があったと言える。渋谷は、日本のIB認定校のIB履修生を対象にした調査に基づき、「海外大学進学には、奨学金があるとはいえ、大きな経済的障壁が立ちはだかっている」（渋谷 2016, p. 49）と指摘しているが、このことは海外のIB認定校出身のIB修了生にも当てはまる場合がままあると言える。

本項ではこれまで、日本ででの居住および将来的な就業希望という動機、ならびに金銭的な制約といった、日本の大学進学につながる非学問的要因を挙げてきた。しかし、日本の大学進学につながる学問的な要因もある。

具体的には、職業資格に結び付く学問分野を専攻することを希望する場合、日本の大学進学志向が強化される。その根拠として、現在日本の大学の法学部に所属しているG17さん、医学部に所属しているG5さん、言語教育を専攻しているG14さんの語りを引用したい。

(G17) 今の学部を決めるってなったときに、法学部なので、やっぱり日本の法について、日本語でまず学んでから、もしまだ興味があったら、海外の大学に行っても良いかなと思うようになりました。

(G5) やっぱり外国籍の人だと、[米国の] メディカルスクールに入るのがまず難しいっていうのがあって。[中略] [日本の場合] 早く終わるのも、6年で終わるっていうのもちょっと[良い]など思っ。[中略] [米国の場合] 8年になっちゃうので。

(G14) [所属大学] に入ろうと思ったときは国際関係学とかが学びたいなって思っていたのと、でも、片隅で、教員免許も取りたいなっていうのがあって、英語の教員免許をちょっと取ってみたい

というか、思っていたので、その2つの両立ができるのって面白いっていうふうに個人的に思っていたので、そういう勉強がしたいなと思って入りました。

上記3名の専攻である法学、医学、教育学が日本の大学で教えられる場合、その教育内容は文脈依存的なものとなる。具体的には、日本の大学の法学部のカリキュラムでは基本的に（国際関係法学科等も存在するものの）日本の法制度についての学習が主となり、また、医学部のカリキュラムは医師国家試験に規定される。教育学部のカリキュラムについては、教員養成系の場合には教職課程コアカリキュラムに依拠することになる。このように、専門職養成と不可分な学問分野を修めることを望む場合、それが日本の大学の選択動機になる。

ただし、職業資格に結び付かない学問分野の専攻を希望し、日本の大学を選択した事例も確認されたことを付言する。具体的には、現在日本の大学の理学部に所属しているG18さんは、以下のように語った。

(G18) 場所というか、大学をどこ〔の国〕を選ぶかっていうのは、あんまり関係がないかなと思っていて、もともと理学に興味があったので、その理学の強みっていうのは、紙とペンさえあればどこでもできるし、誰とでも通じ合えるっていうことなので、お金っていう仮定を外しても、それがどうという話にはならなかったかなと思いますね。

海外のIB認定校出身のG18さんは、高校在籍時に数学や物理に興味があり、一貫して日本の大学への進学を希望していた。その背後には、数学や物理を学ぶのであれば場所（日本の大学か、海外大学か）はそれほど意味をもたないとの思いがあった。結果として、G18さんは、後述するように日本の大学に在学している多くのIB修了生が大学在学中の短期留学等を視野に入れているのとは対照的に、「数学っていう特性上、留学のメリットがもうほとんどないので、〔留学は〕あまり選択肢にはなかったですね」と語った。

すなわち、前項では、大学の本来的機能を重視した進学動機は、漠然とした学問志向／幅広い学問志向と特定の分野に特化した学問志向に分けられ、その志向性の違いが、北米の大学への進学か欧州の大学への進学かを規定していると述べたが、特定の分野に特化した学問志向は、日本の大学への進学につながる場合もあると言える。

さらに、学問的な要因として、注目しているのが、以下の語りにみられるようなIBによるバーンアウトである。典型的な語りを引用する。

(G3) IBで、結構、疲れてしまって、後半。高校3年生のときは本当に心も体もついていなくて、だから、このメンタルと、この気持ちで〔海外大学に〕行ってしまうと、多分、立ち直せないってっていうのが自分のなかでどこかにあって。

(G13) 最後になって、IBが終わってみると、楽しかったのもあるんですけど、疲れたっていうふうなところもあったので。ちょっと日本に1回帰って休憩したいってっていうふう思ったので、多分、日本の大学を選んだんだと思います。

ここで引用したG3さんとG13さんの語りから、IBによるバーンアウトを経験したインタビューイは、休息期間を求めて、負荷が低いと認識している日本の大学への進学を選択したと言える。このことは、日本の大学の教育内容に対して「その教育内容の劣悪な評判」という表現を用いながらも、「過去の消化と未来に向けた充電」のために日本の大学への進学を選択したIB修了生が存在したという先行研究（岩崎 2007）における報告と合致する。IBは学問的に厳格なプログラムと言われ、それゆえ世界中の国や大学によって認知されているが<sup>(17)</sup>、その厳格さが生徒のストレスにつながるということもまた事実である（Suldo, Shaunessy-Dedrick, Ferron & Dedrick 2018）。学問的負荷やそれに伴うストレスによって、上記の語りにあるとおり「疲れた」と感じた場合に、IB修了生は、相対的に学問的負荷が低いと考えている日本の大学の学習環境（あるいは心理的に安定する日本における居住）を選択するのである。

とはいえ、さまざまな動機や制約によって、日本の大学進学に至ったインタビューは、学士課程段階において海外における学びを諦めている、もしくはまったく経験しないわけではない。たとえば、IB の最終試験が近づいていた時期を「少し苦しかったかな」と振り返った G17 さんは、以下のように語った。

(G17) 親と、大学入ってから留学する手もあるんじゃないかっていう話になって、大学自体をいきなり海外にしなくても、何かしら、道はあるはずだよって話になって。〔中略〕国立私立にかかわらず、絶対に、留学制度、こういうのありますよって、どの大学も提示してくださって、それだったら、日本に帰っても、ずっと日本に縛り付けられるじゃないですけど、日本にしか選択肢がないというわけではないんだなと思ったら、そんなに抵抗なく、帰ってくる選択をできたなと思います。

IB の2年間のみを海外で過ごした G17 さんは、当初、「やっぱり2年じゃ足りないなと思って」いたというが、最終的に日本の大学への進学という決断に至った背景には、日本の大学における留学機会の充実があった。「〔両親から〕海外の大学進学するのはちょっと経済的に厳しいかもしれないって言われて、それなら日本の長期留学があるところを選んだらどうみたいなことを言われました」(G15) というインタビューもいた。つまり、金銭的制約等により海外大学ではなく日本の大学進学を選択したインタビューは、日本の大学在学中に留学機会を得ることにより、自身の選択を合理的なものとして受け入れているのである。本稿の調査で得られた知見は、「高校生活の前半時点で海外の大学を志望しながらも最終的には国内の大学へと進学した層は〔中略〕海外で学位を取得するために長期間日本を不在にする長期留学よりも、日本国内の大学に進学した後に語学研修や交換留学等の制度を利用して短期留学を実践することにより、『グローバルな文化資本』と『ローカルな文化資本』の両方を獲得する」(小林 2019, p.25) という合理性を求めているのではないか(=「新たな形での合理的な留学志向の誕生」)

という先行研究の指摘にも裏付けられる。

## 5. おわりに

おわりに、本稿の結果をまとめ、本稿の限界と今後の課題を述べる。本稿は、国際通用性をもつといわれる IB 修了証を取得した生徒がいかなる過程で進学先を模索、決定しているかを、日本人 IB 修了生等に焦点を当てて探索的に明らかにすることを試みてきた。今回の分析結果から得られた知見は以下のとおりである。

日本人 IB 修了生等の海外大学進学を促す要因として浮かび上がってきたのは、日本の大学におけるリアリティショックの予測とその回避、反対に海外大学における周囲の学生の学問志向である。すなわち、日本人 IB 修了生等の海外大学進学動機は、学問探究にあるとよい。彼らの多くは、海外大学進学に際し経済的障壁に直面しながらも、奨学金の受給や相対的に安価な英語による学士課程の模索によって、海外大学進学を実現している。また、海外大学(の学士課程)と一口にいっても、専門教育重視の国々と教養教育も重視する国々とがある(荒井 2018)。海外大学に在学しているインタビューからは、後期中等教育段階において特に関心がある学問分野を明確にできた場合には前者に、そうでない場合には後者にといったように、広い視野に基づく進路選択が語られた。

他方、日本の大学進学を促す要因としては、日本での居住希望、将来的な日本での就業希望、金銭的制約や家族への配慮、職業資格に結び付く分野における学問志向、IB によるバーンアウト、ならびに日本の大学における留学機会の拡充等が挙げられる。海外大学進学の場合に比して、学問志向以外の多様な要因をうかがえる。とはいえ、日本の大学に進学した IB 修了生は、学問を軽視しているわけではない。たとえば、IB によるバーンアウトを経験した IB 修了生は、休息期間を求めて日本の大学を選択したと言えるが、彼らの語りから従来の進学動機研究で指摘されてきた享楽志向(大学で遊びたいから、交友関係を広げたいから)(古市 1993)のような傾向はくみ取れない。彼らは、留年や退学等のリスク(ストレス)の少ない学習環境や心理的に安定した居住環境を求め日

本の大学に進学し、ときに留学機会等を活用しながら、自身に負荷をかけすぎることなく学んでいると思われる。また、金銭的制約から海外大学進学を断念せざるを得なかった IB 修了生の多くも、積極的に留学機会を得ることにより、日本の大学進学という自身の選択に納得しつつ、主体的に学んでいるのではない。

それでは、本稿で得られた知見はいかなる学術的な意義をもつか。本稿は、IB 修了生がいかに海外大学/日本の大学を捉えながら進路選択をしているか、さらには海外大学のなかでもいかに国の選択をしているのかなどを明らかにした。先行研究においては、進学先として IB 修了生によって両者がいかに意味づけられているかは十分に明らかにされてこなかった。また、欧米(欧州や北米)の大学は一つにくくられる傾向にあり、欧州の大学と北米の大学間での選択動機は議論されてこなかった。これらの課題を乗り越えたのが本稿の意義と言える。

さらに、本稿で IB 修了生の進路選択をめぐる現実として描いたこと、具体的にはリアリティショックの予測とその回避といった進路選択動機は、日本の高校から海外大学に進学する生徒の存在が度々報道されている<sup>(18)</sup>現在の動向を踏まえると、その他の日本の高校生の一部にも当てはまる可能性がある。この可能性の検証は、高校生の進路選択の実態にせまるために必要な観点の一つであると思われる。そうした研究の必要性を提起できる点も、本稿の示唆の一つとして挙げたい。

また、IB 普及にかかる政策への示唆として、本稿の知見を踏まえると、IB の普及はインバウンドの効果(海外からの学生の獲得)およびアウトバウンドの効果(高校生の海外への送り出し)をもたらすという単純な想定は難しいと言えるだろう。たとえば、アウトバウンドの効果をもたらし、奨学金制度の充実が不可欠である。また、インバウンドの効果の向上は、日本の大学イメージの変化が伴わなければ難しい。そのイメージの変化は、たとえば学生の学習時間をいかに増加させるかという日本においてこれまでにしばしば指摘されてきた課題の解決なしに(中央教育審議会大学分科会大学教育部会 2012 など)、もたらされることはないだろう。

最後に、本稿の限界と今後の課題を述べる。第1に、インタビュー参加者の偏りである。具体的には、表1に

あるとおり、本稿におけるインタビュー参加者の多く(15/20名)は、海外の IB 認定校の出身であり、かつ、日本の IB 認定校出身者も全員、後期中等教育段階までに何らかの海外経験をj得ていた。この偏りには留意する必要があるだろう。それでは、後期中等教育段階までに海外経験を有さず、IB の履修を含め一貫して日本で教育を受けてきた IB 修了生はいかなる進路選択をしているのか。この点を探索することにより得られる知見と本稿で示した知見とは、いかに異なるのか。これらの点に関する考察は、別稿に譲りたい。

第2に、進学前の意思決定要因がいかに進学後の適応に影響しているのかという点に関する、IB 修了生を対象とした知見の蓄積が必要かと思われる。そもそも、本稿で触れた進学動機研究の蓄積の背景には、大学入学前の意思決定プロセスが入学後の適応状態を左右する重要な要因の1つ(黒田 2021)と言われてきたことがある。本稿では、進学前の意思決定要因と進学後の学習適応を架橋し分析するまでには至らなかった。この点も今後の課題としたい。

<注>

- (1) IB は、1968年にスイスに設立された財団法人国際バカロレア機構(International Baccalaureate Organization)による国際的な教育プログラムであり、IB ディプロマプログラムに加えて、IB 中等教育プログラム(IB Middle Years Programme)、IB 初等教育プログラム(IB Primary Years Programme)、およびIB キャリア教育プログラム(IB Career-related Programme)から構成される(岩崎 2018)。ただし、本稿では、特に断りがない限り「IB」はIB ディプロマプログラムを指すこととする。
- (2) 事実、毎年、100か国以上に所在する5,000以上の大学が、IB 修了生の出願先になっているという。なお、各国、各大学がIB 修了証をいかに認知しているかの詳細は以下参照。International Baccalaureate. “Develop a university recognition policy” (<https://www.ibo.org/university-admission/universities-collaborate-with-the-ib/develop-a-university-recognition-policy/> 2022.1.28.)
- (3) 現在、日本国内におけるIB 認定校等を2022年度ま

でに 200 校以上にすることが目標として掲げられている (2021 年 6 月閣議決定「成長戦略 (2021 年)」)。また、国内におけるこれまでの政策については、「文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム」に詳しい。文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム「日本における IB 教育」 (<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/2022.1.28>.)

- (4) IB 特別入試とは、①「国際バカロレア入試」等の名称で実施されている、IB 修了生のみを対象とした入試、および②推薦入試 [現、学校推薦型選抜] やアドミッション・オフィス入試 [現、総合型選抜] 等の枠のなかで、IB の最終試験の成績などを選抜のための資料として用いる、IB 修了生以外も対象とした入試、以上 2 つから成る (江幡 2020)。IB 特別入試の導入、実施が、教育再生実行会議第四次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(平成 25 年 10 月) 等を通じて各大学に推奨されている。
- (5) なお、諸外国の先行研究を探ると、IB 修了生の教育アスピレーション (学士、修士、博士の学位の取得を目指す割合) の高さを実証した研究 (Pretlow & Hong 2021) や、IB 修了生の進学実績の報告 (Caspary 2011 など) 等を確認できる。また、中国において、教育のグローバル化やグローバル人材養成という政策のもと、学校教育に IB が導入され、IB 修了生の大多数は欧米の大学を進学先に選んでいることを明らかにした研究もある (黄 2016)。しかし、管見の限り進路選択の過程や動機などを当事者 (IB 修了生) の視点から議論している研究はほとんど見当たらない。
- (6) 本稿が依拠した調査のインタビューの多くは帰国生として捉えられることから、帰国生 (帰国子女) 研究も参照した。結果として、「彼らが日本の大学入試をどう認識しているか、どのようにとらえているか」(井田 2015, p. 101) を明らかにした研究は確認されたものの、本稿のように、いかに当事者によって日本の大学と海外大学が進学先として比較衡量されているかという視点をもつ研究は見当たらなかった。ゆえに、本稿の知見は、帰国生研究の議論の発展にもつながると考えられる。
- (7) 本稿のアンケート調査ならびにインタビュー調査は、令和 2 年度学生支援の推進に資する調査研究事業 (JASSO リサーチ)「国際バカロレア (IB) 履修生に対する進学支援の在り方に関する研究」の一環で実施したものである。同調査研究の代表者である菊地かおり氏と筆者 (共同研究者) が共同で調査を企画・実施した。本稿の執筆は、筆者が単独で行った。
- (8) 研究方法としての Zoom を用いたインタビューについて、議論は端緒についたところであるが、地理的に多様な人々による研究参加が可能になる等のメリットが報告されている (Gray, Wong-Wylie, Rempel & Cook 2020)。
- (9) たとえば、米国のリベラルアーツ・カレッジに在学中の G2 さんは、現在の大学を進学先に選択した決め手について、「でもやっぱり、奨学金が、結局最後の決め手というか。お金がない者には、入れないので、大学には、1 番出してくれたのが、そこだったので。最終的に合格通知が出て、どれに絞ろうかというようなタイミングのときに、奨学金が 1 番多い所。残念ながら、僕の場合は、民間の団体の奨学金がもらえなかったので」と語った。
- (10) 米国や英国における授業料の高騰については丸山 (2012) を参照。
- (11) 加えて、「アメリカだと、一応受けたんですけど学費が高めだし」(G9 さん) という理由でカナダの大学を選択したインタビューもいた。
- (12) 英国は、国内資格としても IB が機能しており (花井 2016)、IB 修了生の受け入れに積極的な国の 1 つとして知られている。
- (13) なお、G8 さんは幼い頃から医師になるという夢を抱き、現在トルコの大学の医学部に在学している。進学先を模索する過程で日本の大学を検討したこともあったようだが、日本の大学受験とトルコの大学受験との差異について、「[トルコでは、受験あるいは合格のための IB の最終試験の] 点数も割と決まっている学校 (大学) が多かったです。[中略] そこは日本とはちょっと違うのかなと思います。[中略] 足りりがすごく低いんですよ、トルコは。[中略] 僕の学

校が33だったんですよ。他の学校だと30とか20台の学校もあって。1個だけ40の学校があって、そこは僕、受からなかったんですけど」と語った。G8さんの述べたとおり、日本の各大学の国際バカロレア特別入試の募集要項を参照すると、出願や合格に必要なIBの最終試験の点数(45点満点)を明示していない大学が多く、他方、医学部医学科の場合には、最終試験で38点以上の取得を求める大学が見られる(東北大学2021、筑波大学2021)。このような入試の状況が、G8さんによって日本の大学に進学しなかった理由として直接的に語られたわけではないものの、日本の大学への進学を回避する(海外大学を選択する)一因になる可能性がある。

- (14) 留学についても同様の3段階を経るといわれている(Salisbury, Umbach, Paulsen & Pascarella 2009)。
- (15) 英国の大学の入学者選抜におけるIBの活用方法について、詳細は以下を参照。International Baccalaureate, 2016, “Guide for IB students applying to UK institutions,” (<https://www.ibo.org/contentassets/5895a05412144fe890312bad52b17044/recognition---international-student-guide-uk--march2016---eng.pdf.pdf> 2022.1.28.)
- (16) なお、海外大学進学者からは、将来の目標に関して、特定の職業というよりも、「どこで働きたいとか希望はないんですけど、いろいろオプションを狭めないようにしていきたいと思っています」(G1)といったように、選択肢を狭めたくないという希望が語られた。
- (17) International Baccalaureate. “Universities: Collaborate with the IB” (<https://www.ibo.org/university-admission/universities-collaborate-with-the-ib/> 2022.1.28.)
- (18) 朝日新聞(2021)「応援ゼロ、英語力不足の私が徳島からスタンフォード大へ」(<https://www.asahi.com/articles/ASP5P5KGBP5LUTIL04W.html> 2022.1.28.) / 毎日新聞(2021)「米ハーバード大に合格 茨城・松野さん 地方公立校から難関突破」(<https://mainichi.jp/articles/20210529/k00/00m/040/069000c> 2022.1.28.)

#### <参考文献>

荒井克弘, 2018, 「高大接続改革・再考」『名古屋高等教

育研究』第18号, pp. 5-21.

Casparly, Kyra, 2011, *Research brief: Postsecondary enrollment patterns of IB certificate and diploma candidates from US high schools*, Menlo Park, CA: SRI International.

Creswell, John W. & Plano Clark, Vicki L, 2007, *Designing and conducting mixed methods research*, Sage publications.

(=2010, 大谷順子訳『人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房).

中央教育審議会大学分科会大学教育部会, 2012, 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ)」.

江幡知佳, 2020, 「日本の大学における国際バカロレア入試の意図と葛藤—『旧来型学力重視の選抜』-『新しい能力重視の選抜』という視角から」『比較教育学研究』第60号, pp. 2-21.

遠藤祐貴子, 2020, 「国際バカロレア修了生の進路選択過程に関する研究—St. Nicholas Schoolの卒業生の進路地域差に着目して—」令和元年度九州大学教育学部卒業論文.

福嶋将人・江里口歡人・飯野啓, 2019, 「高大接続と国際バカロレアプログラムの課題—日本のIBDP生の進路選択に関する一考察—」『国際バカロレア教育研究』第3巻, pp. 31-41.

淵上克義, 1984a, 「進学志望の意思決定過程に関する研究」『教育心理学研究』第32巻第1号, pp. 59-63.

淵上克義, 1984b, 「大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究」『教育心理学研究』第32巻第3号, pp. 228-232.

古市裕一, 1993, 「大学生の大学進学動機と価値意識」『進路指導研究』第14巻, pp. 1-7.

Gray Lisa M., Wong-Wylie Gina, Rempel Gwen R. & Cook Karen, 2020, “Expanding qualitative research interviewing strategies: Zoom video communications,” *The Qualitative Report*, Vol. 25, No. 5, pp. 1292-1301.

花井渉, 2016, 「イギリスにおける国際バカロレア認証に伴う資格試験制度変容に関する研究」『比較教育学研究』第52号, pp. 90-112.

半澤礼之, 2007, 「大学生における『学業に対するリアリ



- ティショック』尺度の作成」『キャリア教育研究』第 25 巻第 1 号, pp. 15-24.
- 半澤礼之, 2009, 「学業志向的な大学進学動機を有した大学生の『生徒的-非生徒的学業態度』—『学業に対するリアリティショックとその対処』モデルの背景の質的検討—」『中央大学大学院研究年報』第 38 号, pp. 61-75.
- Hossler, Don & Gallagher, Karen, Symms, 1987, “Studying student college choice: A three-phase model and the implications for policymakers,” *College and university*, Vol. 62, No. 3, pp. 207-221.
- 井田頼子, 2015, 「日本の大学入試に対する海外就学経験者の認識—帰国生入試を事例として—」『大学評価研究』第 14 号, pp. 101-116.
- 岩崎久美子, 2007, 「大学との接続調査—ディプロマ取得と大学入試」相良憲昭・岩崎久美子編『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店, pp. 99-127.
- 岩崎久美子, 2018, 『国際バカロレア グローバル時代の世界標準プログラム』明石書店。
- 小林元気, 2019, 「高卒後の進路における海外大学進学志向の規定要因」『日本高校教育学会年報』第 26 号, pp. 18-27.
- 黄丹青, 2016, 「中国の国際バカロレア導入校における進学指導システムについて」『目白大学 人文学研究』第 12 号, pp. 243-251.
- 栗山尚子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見孝, 2001, 「大学進学における進路決定方略を支える多重的制約充足と類推」『教育心理学研究』第 49 巻第 4 号, pp. 409-416.
- 黒田祐二, 2021, 「自律的・統制的大学進学動機と入学後の適応—高等学校における進路指導・生徒指導・学習指導に対する自己決定理論からの示唆—」『福井県立大学論集』第 55 号, pp. 81-97.
- 丸山文裕, 2012, 「大学授業料を巡る動き—アメリカ、イギリス、そして日本」『国立大学財務・経営センター研究報告』第 14 号, pp. 1-3.
- 松井範博, 2009, 「アメリカの大学アドミッションとアドミッション・オフィサーの新しい課題」『大学評価・学位研究』第 10 号, pp. 3-23.
- 永山賀久, 2013, 「グローバル人材育成と国際バカロレアについて」『化学と教育』第 61 巻第 7 号, pp. 330-333.
- 中村高康, 2011, 「高校生のローカリズムと大学進学」『高等教育研究』第 14 集, pp. 47-61.
- 大谷尚, 2019, 『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで—』名古屋大学出版会。
- Pretlow, Joshua & Yihua, Hong, 2021, *Educational Aspirations of IB Diploma Programme Students*, RTI International.
- Salisbury Mark H., Umbach Paul D., Paulsen Michael B. & Pascarella Ernest T., 2009, “Going global: Understanding the choice process of the intent to study abroad,” *Research in higher education*, Vol. 50, No. 2, pp. 119-143.
- 渋谷真樹, 2016, 「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」『教育学研究』第 83 巻第 4 号, pp. 423-435.
- 嶋内佐絵, 2014, 「グローバル人材育成と大学の国際化に関する一考察」『横浜市立大学論叢人文科学系列』Vol. 66 No.1, pp. 109-126.
- Suldo Shannon M., Shaunessy-Dedrick Elizabeth, Ferron John & Dedrick Robert F., 2018, “Predictors of success among high school students in advanced placement and international baccalaureate programs,” *Gifted Child Quarterly*, Vol. 62, No. 4, pp. 350-373.
- 東北大学, 2021, 「令和 4 年度 (2022 年度) 特別選抜入学試験学生募集要項 国際バカロレア入試」.
- 筑波大学, 2021, 「令和 4 年度 (2022 年度) 国際バカロレア特別入試 (11 月募集 4 月入学) 学生募集要項」.
- 謝辞
- 本研究は、令和 2 年度学生支援の推進に資する調査研究事業 (JASSO リサーチ) の助成を受けたものです (研究課題名: 国際バカロレア (IB) 履修生に対する進学支援の在り方に関する研究/研究代表者: 菊地かおり)。
- 本稿の執筆に当たり、アンケート調査ならびにインタビュー調査にご協力いただいた IB 修了生の皆様に、心より感謝申し上げます。